

第二十六回

光照寺報恩講 法話

「仏さんはいらっしやいますか」

田畑正久先生 講述

(佐藤第二病院院長、龍谷大学大学院教授)

〈開式挨拶 佐々木玄吾護持会会長〉

おはようございます。私は光照寺護持会会長になっていきます、佐々木玄吾と申します。宜しく
お願いいたします。

先程ここで役員の打合せがあつたのですが、その時にここのご任職が言われるのには、今回は
二十六回目の報恩講だと。その二十六回という会は、二十六年と考えてですね、随分長い事だっ
たのだなあという風に思うのですね。私は、二十六年前と言えば何歳だったのだろうかなあと思
つて考えてみましたらですね、今、八十六歳ですから、二十六年を引くと、私が六十歳の時に、
この光照寺が始まったんだなあという事を思つてですね、長いような短いような事だったのだと
思いました。

最初はもう、本当に小さな集まりだったのですけれども、二十六年経つとですね、本当に立派
な会が成立してですね、今日を迎えることが出来て、本当に良かったなあと思います。私、二十
六年前の最初から責任役員という役を受けて、それがずっと続いているのですね。本当にその間、
光照寺の寺族の人達、それからご門徒の人達が、本当に一所懸命支えてですね、今回、五十七名
の方を、お迎えして、報恩講が出来る事を大変嬉しく有難く思っています。

そこで、今回、田畑先生という方と私は、若い時からずっと一緒に聞法してきたものですから、

非常に今回ここに来られて、お話しされる事を古い友達に会う気持ちで、非常に嬉しく有難く思っています。

講題は、「仏さんはいらっしやいますか」という講題ですね。田畑先生は、お医者さんで、外科のお医者さんです。お医者さんをしながら、どうしても仏法というものと共に生きなければ、お医者さんの仕事も全うできないというふうに思っていますね、両方されているのですね。お医者さんというのは、結局、「老病死」、「生老病死」という事を扱うのですよね。そこで、歳をとるという事はマイナス、若いという事が良いのだ。「老・病」、病気というのはマイナス、悪い事なのだ。健康という事が良いのだ。そして、それからもう一つは死。死ぬことは悪い事なのだ、不幸な事なのだ。そして、生きるという事は、良い事なのだというふうに考えてお医者さんは、医療をされるわけですね。ところが誰もが皆、老病死に捕まって、最後は、不幸の完成で終わるという事になるわけです。すべての人はですね。老病死に捕まって不幸の完成で終わる、それでは何の人生かわからない。そこで、どうしても、そこに仏法と医療とが、関わっていくという事が、本当の幸せになるのだという、そういうことですね、お医者さんをしながら、仏法の話がされるわけですね。

「仏様がいらっしやる」ということになれば、過去も生き現在も生き、それから、死んでから先も生きるという、本当にそういうことなのです。 「仏様がいらっしやる」という事は、なま

んだぶつと、念仏を申して生きるといふ事なのですね。だから、是非とも、なまんだぶつと念仏申して生きられれば、過去も生き、現在も生き、未来も生きるのだ。そういうお話をされると思っています。それを私も、ここで楽しみに聞かせてもらいます。そして、お医者さんが、実際の治療の現場では、どういう事になるのか。仏法、仏様がおいでになり、大きなものにおまかせして生きるというようになるのではないのでしょうか。

例を一つ、私は、言いたいと思います。私は、腰が痛くてね、若い時に、コルセットをはめていたんですよ。その時、田畑先生に出会って、「私、腰が痛くてしょうがないんですよ。」って言ったんです。まだ、六十位の時です。そしたら、私のコルセットを見てね、「こんなのは、はずしても関係ありませんよ。」そしたら私、急に楽になつて、コルセットをはずしたら、腰痛が治ったのですよ。田畑先生は、結局、「自然治癒力」というか、人間は、放つておいたら治るといふのですね、自然に治癒する力を非常に大事にされる先生なのだと思うのですね。それから、「仏様がいらつしやる」といふ事はですね、あんまりジタバタしないで、鷹揚に生きていったら良いのだ。そういう事を、教えて下さるのではないかなと思って、今回は、非常にその話を楽しみに、皆さんと共に聞かせて頂きたいと思います。

〈光照寺住職 挨拶〉

田畑先生、第二十六回光照寺の記念すべき報恩講に講師として、ご法話をいただくことをありがたく思っております。二十六回目でございます。ちょっと力を入れました。ありがとうございます。皆様、ようこそご参詣下さいました。田畑先生のご紹介を私なりにしていきたいと思えます。司会の方が詳しく先生のご紹介を、これから私の終わった後にしてくれますので、最近の若い人の言葉で「かぶらない」とか、英語で言う「ラップ」するとか、私は「コラボ」するとか、最近覚えた言葉を連発してみたいと思います。なるべく「かぶらない」で。

今、田畑先生に申し上げますように、光照寺の報恩講が第二十六回目なのです。ということはお寺ではないかと、その通り若いお寺です。若いお寺で、今、田畑先生のお孫さんが三歳七カ月というけれど、だいたい光照寺もそれくらいの年齢かと思えます。産声からちよつと走り回っているという感じではないかと思えます。二十六回目の報恩講を皆様と共に勤めることが出来まして、ありがとうございます。皆様ご承知のように、先ほど私が導師を勤めたわけですが、今まで自信を持って、大きな声で皆を引っ張らなければ、というおもいでやってきましたが、去年あたりから、声が続かなくなってきたということ、調声だけにさせていたただいたりして、老化を皆様にさらしているわけですが、今日は報恩講で何とか声を出して、何とか何とか、やって

きましたが、やっぱり声が続かなくなってくる。老化かなと思います。報恩講となると、どうしても力が入るといふ思いが、声は大きいですが、続かなくなったという現象が、現れているのだと思います。二十六回目を踏ませていただきました。それですね、田畑先生と愚庵の講師部屋でござんて挨拶させていただいたのですが、愚庵という、そもそもそのことを、短く先生にご紹介しました。皆様も聞法道場「愚庵」というのは承知しておられると思うのですが、田畑先生に短く話していますので、また重ねてしましますが、これがとても大事ではないかと思えます。二十六回目。愚庵を造ってから報恩講を始めて二十六回目なのです。田畑先生から愚庵が出来たのが何年かと、平成二年なのです。ですから今、平成二十八年ですから、二十八マイナス平成二年の二で、二十六です。そうすると計算が合うのです。愚庵を造ってから報恩講を始めた。その、記念すべきが、田畑先生の先生も、細川巖先生なのです。私も細川巖先生を先生として、十二年間、晩年の先生にご縁をいただいております。共通することは、細川巖先生を師とするという、深い御因縁が先生にあるわけです。そして、愚庵の報恩講第一回、第二回は、細川巖先生が来てくださいます。報恩講を勤めてくださったのです。愚庵の方で。病気になられて、亡くなっていかれた。こういうわけです。その後、櫟先生にずっと報恩講も、聞法会も、続けていただけたけれど、櫟先生もこれで施設にはいられて、来られなくなったという中で、報恩講をどうするかという事で、櫟先生が、また、復帰して存命までいきたいという事でしたら、何としても、思

いましたが、やっぱり歳には勝てないということがあったわけでございます。

皆様ご記憶かと思いますが、一昨年は、私と副住職で、櫛先生が来られるまで、つなぎで、報恩講を勤めようということで、珍しい報恩講を勤めたのです。櫛先生が来られなくなったので、私と副住職の次は、志慶眞先生、去年は、沖縄の小児科の志慶眞先生でした。又、田畑先生とも同じビハーラという、仏教におけるターミナルケアと申しましょか、キリスト教で言えばホスピス、仏教ではビハーラと、こういうことでございます。ビハーラという中に、田畑先生も、志慶眞先生も、大谷派の中でご活躍されているのです。大谷派だけではなくて、田畑先生は龍谷大学の大学院の教授として、お医者さんでありながら勤めておられています。去年の志慶眞先生も、お医者さんなのですが、先生は細川巖先生なのです。ですから結び付けているのは細川巖先生からお育ていただいた田畑先生、志慶眞先生、私と。ここにも、誰々というと、私も細川先生に聞いたと、全部名前を挙げるわけにはいきません。この辺で失礼させて省略させていただきます。そういうご縁なのです。それで あそこに、『細川先生のご生涯』という本を佐々木玄吾先生が出してくださいまして、田畑先生と共通するところが細川巖先生だから、あの本があるから、一つ皆様にもお薦めしようと、置かせていただきました。田畑先生の本は色々ピアノの上にあります。あれでは足りないのです、色々な本が出されておられるのですが全部そろえることはできませんでしたが、ピアノの上に乗るぐらいの中でご紹介しようと置かせていただきました。今

日のお話を聞けば、本をもっと読んで見ようとか、こういうことで、終わった後は、本はほとんど売り切れて在庫がなくなるのではないかと、早い者勝ちになるのではないかと、思っておるのですが、こういう余計なことをいうのが、光照寺の住職の特色でございます。これが悪くもあり、良くもあるというふうでございますけれど。

司会とかぶらないで、田畑先生を話すということを端折ってどこでフィニッシュするかというと、この間、東京の日野市で光明団東京支部の六十周年記念の会座がありました。これも細川先生が東京に出てきて、いずみ寮から、いずみ会館となった願いを持って、玄吾先生のご自宅から始まった、そういう中で六十周年があったわけですが、その時に田畑先生も来られて、六十周年のご法話をされたわけです。副住職は導師をして、私も何か話そうとして、田畑先生の言葉からつまんで、つまんで、糸で繋いで、何とかまとめて勤めたわけですが田畑先生はご存知ですよね。そういうようなついでの間、日野の六十周年があったのですけれど、そこでお会いして、そうして、志慶眞先生、田畑先生このビハーラという、私も来年の一月八日で七十五歳、後期高齢者になります。まだ前期ですが、元気ではなく前期です。(笑) 来年の一月八日、あと一か月ちよつとで後期高齢者になりますので、何か胸を張って言わないといけないのですが、いよいよ歳をとってきたことが認知されるような、国でレベリングされるようなところには、言いたいわけです。やっぱりビハーラ、お医者さんと、坊さんが、一緒になってその生老病死を超えることを

話せるということは、凄いと思うのです。坊さんは医学のことが詳しく分からない。田畑先生は医学のことが詳しくて、また、仏教のことが詳しくて、そうして、龍谷大学の大学院の教授までされる。これは私と比べれば月とすっぽんですが、同じ細川巖先生を先生としているのです。こういうところで迫らないと、接点が無くなるという、ぜんぜん月とすっぽんではないかと、こういうことがあるわけです。同じ先生から教えを聞いても、こんなに違うのかという違いが、これからはつきり分かりますから。お医者さんが浄土真宗の話をする。これは住職が言っているのと全然違う。この違い目がこれから始まるのであります。これ以上の余計なことを言いますと、艶消しになりますので田畑先生お許し願いました、後は、司会の藤原さんが明快な田畑先生のご紹介をしますので、これで譲ります。私はこれで失礼いたします。先生宜しくお願いいたします。

2016年 報恩講 田畑正久先生 『仏さんはいらっしゃいますか』

皆様こんにちは。今日初めて池田さんのお寺に伺い、前からどういところかなあと思っていました。あるということは知っていたのですが凄いいことをされているのだなあと、特に浄土真宗は東京ではなかなか、東京より上（北）の方では門徒が少ないので大変だなあと思っておるのですが。今日は『仏さんはいらっしゃいますか』という講題で話をさせていただきます。

少し自己紹介を兼ねながらどうしてこういう講題になったかをちょっとご紹介します。先ほどご紹介がありましたように大学の時に、仏教に関心があつて仏教青年会に入つたのではなかつたのです。九大の仏教青年会は医学部と法学部の先輩方が色々なボランティア活動をしていてそのボランティア活動の加勢をする学生さんは部屋代がタダの寮があるのです。私はその部屋代がタダな方に惹かれて仏教青年会に入りました。

だから仏教にどういイメージを持っていたかと言うと仏教はこの世で役割を終えているのだと。博物館や美術館に行つたら仏教の展示物があつて科学の発達する前は仏教が多くに関心を集めていたが、今みたいに科学が進歩すれば、人間はみんな科学の進歩で幸せに愉快地楽しく生きていける、とこういう掲示があるだろうぐらいに思っておりました。しかし、医学部の同級生が

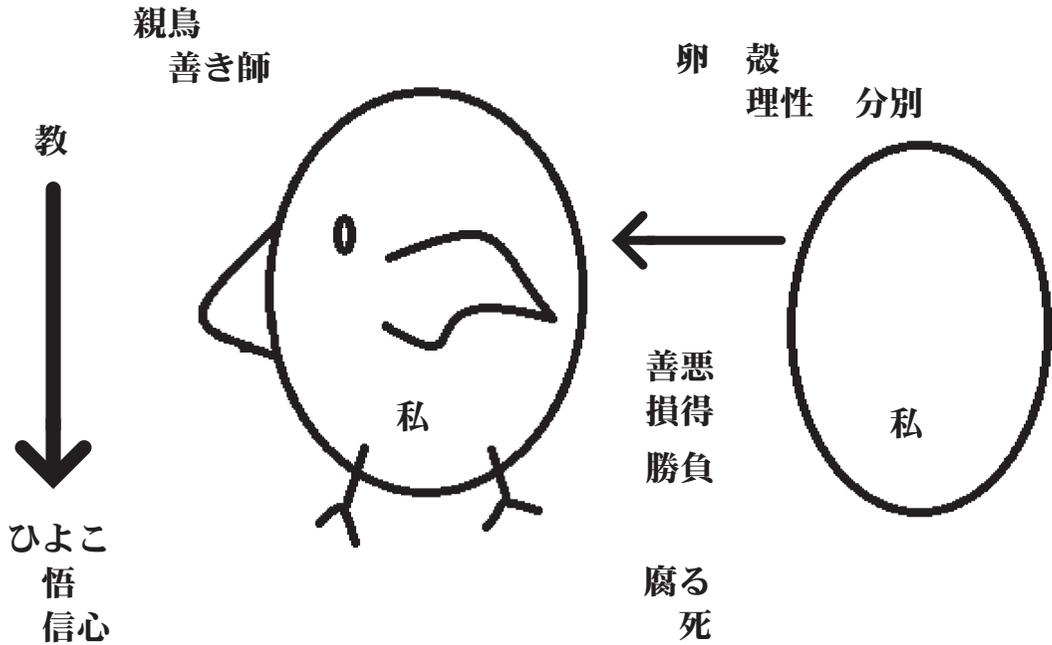
何人か入寮していて、部屋代がタダだからですね、仏青の寮に入ったのです。そうしましたら毎週一回朝六時半に仏間で勤行がありまして『般若心経』をあげます。そして寮の掃除をしてそれから食堂で一緒に食事をしてという行事予定があるわけです。

二年目に仏教青年会の総務という責任者の役割が回ってきたのです。「仏教はこの世で役割が終わっているのだ」と思っていたのに仏教青年会を引っ張って行かなくてはいけないという、何とか、どうしたらいいかと困ってそうこうしている時にたまたまですね、ある時食堂で新聞を見ていたら福岡教育大学仏教研究会講演会開催という、三行か四行のお誘いの欄に掲載があり目についたのです。それで他の大学にもこのようなことをしている人がおるなあと思っって早速連絡先に電話をかけて、そしてそこに訪ねて行ったわけです。

それで初めて仏教の講義を聞いたのです。初めての方もおりますので、私にとって物凄い印象で忘れることのできない喩え、がお話の中にあつたのです。そのお話の中で、私たちはみんな卵の殻の中におけるような存在だと。これは私たちが言ったら理性・知性、理性でしっかりと分別して考えるという殻（自己中心の思い）。しかし、自分は殻の中にあるとは思っておりません。私たちは。この私は仕合わせを目指して生きています。どうしたら仕合わせになれるのだと言ったら、仕合わせの為のプラス条件を増やしマイナス条件を減らす。そしてみんなから良い人間だと思われたい。悪い人間だと思われたくない。出来るだけ得になることを重ねていって損にな

(板書)

しあわせ (+) (+)



ることには近寄らないようにしよう。出来ることならば勝ち組の方に入りたい。負け組の方には入りたくない。こう生きているのだと。

分別で善悪、損得、勝ち負けをしつかり考えながら生きていくのだが、そのまま生きていくと老・病・死ということで卵は結局腐って卵の死をむかえるしかありません。しかし、卵は死ぬために生まれて来たのかというところを決してそうではなく、親鳥に抱かれて親鳥から熱を受ける。これが仏教の教えということである。私たちに与っては南無阿彌陀仏の教え（浄土の教え）を受けていく。親鳥というのは善き師、善き友である。熱を受けていくことで段々、中身の部分が育てられてゆく、そして物を見る目、

考える頭、食べる嘴、羽ばたく羽、歩む足ができて時期が熟してひよこになる。これを禅宗では悟りといい、浄土教では信心をいただくことです。ひよこになって初めてここに大きな仏の世界があるということが分かると同時に、自分が分別という殻の中にいたことを知らされる。そして更にひよこはですね、教えをいただきながら親鳥になっていくということが仏になるという事でしょう。

こういう話を聞いて、その当時私は二十二歳でしたけれど、自分の今までの歩みを先生は良く知っているなあ、見透かしておられるのか、よく知っているなあ。まさにこっち（殻の中）ですよね。二十二年間はこれが全てだと思って一生懸命頑張ってきたわけですから、しかしそれしかないと思っていたのに殻の中の世界だった。それを超えた世界があるのだと言われて、そんな話を初めて聞いたという思いがしました。

そして、一回大きな世界に出てみたいなあと思います、一時間の講義のあとの三十分の質疑応答の時に、「先生、今日、初めてこんな話を聞いたのですけれど、その大きな世界に一回出てみたいのですがどうしたらいいのでしょうか」と聞きました。そうしたら先生は、「毎月一回こういう会をしていますから一年続けてみてくださいください」とおっしゃいました。それから一年続いた頃、「良く分からないけれど、非常に興味深い話で、更に聞いていきたい話です」と感想を言ったら、先

生が「田畑さん三年続いたら分かりますよ」と言われたのです。それからまた三年続いたのです。途中で分かったことがあります。一生聞いていくことが大事なのだなあと。「一生被教育者としての歩み」ということが大事だということが分かった。

一生被教育者としての歩み

それが三年から今日、もう先生からは二十六年位のお育てをいただきましたけれど、私は九州でしたからそんなに広島に行つてたつぷりとはなく、端の方でいつも細々と切れずに続いてきて今日に至っているわけです。先生との出会いを通して、私は自分の人生の生き方をぐらぐらといつの間にか方向を変えられた思いがあります。たぶん私が仏教に出遇わなかったならば世間の表層で、損だ得だ、勝った負けた、善だ悪だ、と言って、のたうちながら色々な愚痴を言っていると申すのです。だけど仏法の教えに出遇う事によつて、そういう自分が見えてくるという世界があるのだなあと。本当にひよこになって鶏になっていく歩みがあることを聞いてみれば、私の場合には蓮如上人が「宿善開発して善知識に遇う」という、そういう仏法を大切にされた家族とか先祖がいたから、西本願寺の門徒の家なのですけれど、そういう家に生まれたから宿善開発して先生に出遇つたのだなあとという思いがあります。そして今、仏教を勉強しながら宝の蔵に入った

のだけれど、勉強しないといけないなあと思いつながら、なかなか、先生の言われたような「原典を勉強しなさい」と言われても出来ていない私だなあという思いがしている。

私は医療の仕事、外科をずっとしていたのですが、外科の仕事をするということと、仏教の聞法をするということは別々のことだと思っていました。埼玉医科大学というのがあるのですが、

その秋あきづきりょう月よう龍りん珉みんという鈴木大拙先生のお弟子さんが哲学の教授をしていたのです。秋あきづきりょう月よう龍りん珉みんと

いう方が医学部の学生さんに、「皆さんが医療の仕事をされるということは、人間が生まれ生きていくうえで必ず老いて病気で死ぬという四苦の課題に取り組んでいくのですね。医療はこの四苦の課題に取り組んでいくのです。でもこの課題は仏教が既に二五〇〇年の歴史を持ってこの四苦の課題に取り組み、その解決の方法を見出しているのです。同じことを課題とするわけですから医療にたずさわる者は是非とも仏教的素養を持って欲しい」と言って、医学部の学生さんに語りかけていたという本を読みまして、ああそうだったのか、仏教を学ぶという事と、自分が医療の仕事をするということ、同じことの課題だと知って勇気づけられたことがあります。そういうことから仏教と医療ということに関わってきたのです。

〈板書〉



それからですね、丁度私が四十前後の時に、大分県に中津という所があるのですが、その国立病院の外科の責任者をしておりました。外科というのはどうしても癌の患者さんの手術が多いので、大腸癌、胃癌、胆石、乳癌とか、一般の外科をしておりました。良くなった患者さんには非常に喜んでもらい、よかったなあという思いがあります。ところが癌の手遅れで見つかったとか、進行癌の為に手遅れで手術したが再発した。そういった患者さんと関わらざるをえないのです。そういった人たちは必ず死んでいくわけです。私は大学にいる時には入院患者さんには必ず朝と夕方、患者さんの所に訪ねて行って、「どうですか」と声掛けしたり、顔を見たり、言葉掛けしなさいと教育されてきました。毎日、朝夕、顔を見ますと、段々人間関係が出来てくるわけです。そうすると良くなっていく患者さんは一緒に喜べるのだけれど、段々死んでいく患者さんに対して、せつかく人間関係が出来ていったのにこちらが知らないというわけにはいかないのです。そうすると、こういう人達にも救いというものがあるかもしれないかと漠然とした

思いになり、こういう患者さんにどういう言葉掛けをしたらいいのかなあと課題になりました。ある時、先生（細川先生）に、「亡くなつていく患者さんにどういう言葉掛けをしたらいいのでしょうか」と質問をしました。そうしたら先生が、「大事なのが二つあるのだ」と言われました。「一つはおまかせするというをしつかり言つてあげなさい。もう一つは仏さんがいらつしやることをしつかり言つてあげなさい」と言われた。

〈板書〉

おまかせする

仏さんがいらつしやる

私は四十前後ですから、二十二歳から聞き始めてもう十六、七年経つた時で、仏教というものも少しは分かったようなつもりでいた時でした。だけど改めて「仏さんがいらつしやることを患者さんに言つて上げなさい」と言われた時に物凄く戸惑いました。なぜかと言つたら、私は仏さんがいらつしやるということを自分の言葉で言えないのです。だから本当にそこに仏さんがいらつしやることをどう伝えるかということは、自分がどう仏さんをいただいて、本当に自分で消化した言葉を言わないと、単に言葉をこんなに聞きました、こんなに聞きましただけではちよつと

会話にならないですよ。その時、聞法を始めて十六、七年経っていたけれども、ああ仏教が分かっていないなあという思いがしました。

今、私は大学院の学生さん、大学の学生さんに、龍谷大学の真宗学ですから、お寺の子弟が八割くらいです。そこで学生さんとか院生に、「仏さんはいらっしゃいますか」と質問をするわけです。そうすると九割方分かりませんと言います。ですから具体的に「仏さんがいらっしゃいますか」ということをどう受け止めるか……という大学院のある学生さんは仏壇の本尊の阿弥陀如来像を見て、「あれが仏さんではありませんか」と言う分けです。仏さんというのにも真仏と化仏というのがあります。

〈板書〉

真仏

化仏

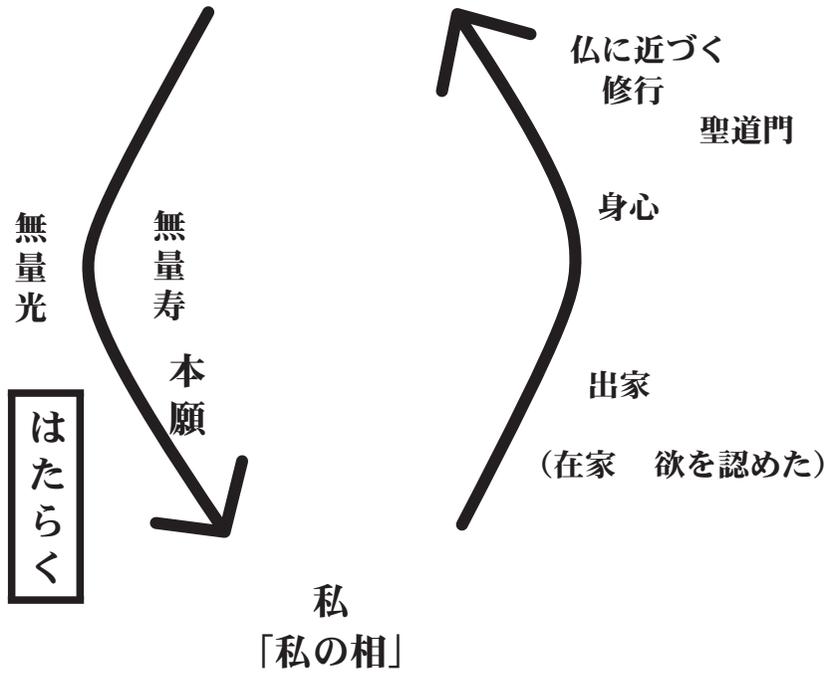
どうということかと申しますと、普通仏教と言いますのは、私が仏さんの世界を目指してお釈迦さんが歩まれた歩みを追体験しながら、禅宗の方がおっしゃいますように、お釈迦さんが歩んで行った歩みを私たちはしていくのです。本当は出家ということがあって、出家ということはどう

いうことかと言うと、欲を認めた生活をするものを在家と言います。出家することで欲を否定します。欲を否定するのです。そして身と心を修めていって、仏に近づくというのが一つの聖道門という形で教えてくれている仏教です。この時は、私が目指す仏さん、ということとは、仏さんを目指して頑張つて行こうとした場合には向こう側に見える仏さんを化仏と言います。なぜかと言ったら、自分に全然はたらいっていませんから。仏さんはこんなだろうと、仏さんはこんなはたらしきだろうと、自分でイメージするのですが、仏教が分からないものが、イメージして本当は分かるはずがないのです。ところが自分が学校で学んできたものや、仏教的なものに触れていると仏教はこんなものだ、仏教の救いはこんなものだと思ってしまうのです。大体私もそうでした。自分でイメージした仏さんや仏の救いは間違えています。そういう意味では、向こう側に眺めて目指すとこの仏さんは化の仏さんです。

真仏というのは仏さんがいらっしやいますといった、仏さんは仏さんの方が私たちに、はたらいている。はたらくというのは、私に具体的に「はたらいている」ということによって本当の仏さんですよ。ですからこのところどうしても自分にはたらいっている仏さんに触れないと、仏教でもなんでもないということですよ。ですから、これは話すと時間がかかりますが、具体的には仏さんの光に照らされる。善き師、善き友を通して、仏さんの無量光という、仏さんの智慧に照らされて、私の姿がはっきりと知らされる。私の姿がはっきりと知らされないと、自分はお経

(板書)

涅槃



を抛り所に歩いて行こうということが定まらない。

私のフェイスブックで知り合いの人が、若い頃、『般若心経』を何回かトライしてみたけれどなかなか難しいと。だいぶ人生経験を経て六十過ぎたし、もう一回トライしようと思って『般若心経』の解説書を買いましたとフェイスブックに書いてあったので私はちょっと書いたのです。「欲を認めた生活」をしながら、「欲を超えよう」とする矛盾していることをしようとするから分からないのだと書いたのです。その人はなかなか受け取れないでしょうね。だからやればできるのだ。自分の寄っ

て立つところが欲を認めた生活をしながら、欲を超えた世界に生きたいというのは、それは無理なのです。浄土教では無理ではなくて『正信偈』の中に「不断煩惱得涅槃」とあります。ここに仏さんのはたらきに触れることによって私の姿がはつきりしてきて、「念仏するものを浄土に迎え摂る」ぞ。私を必ず救うという、本願の世界に触れていくことを通して私たちは「おまかせ」します。世間的なおまかせもあるのですが、仏さんにおまかせしますという摂取。『歎異抄』の第一章では「念仏もうさんとおもいたつころのおこるとき、すなわち摂取不捨の利益にあずけしめたまうなり」、お念仏に触れることによって仏さんに「おまかせ」します。私のすべきことは今、生かされていることで果たす役割、使命、仕事です。「私の役割を精一杯生かさせていただきます、南無阿弥陀仏」、と言って、精一杯生きる世界に導いてくれる世界が仏さんの無量寿、無量光の世界です。南無阿弥陀仏に触れることによって私たちはそういう世界に出させて頂くのです。

仏さんのはたらきに触れることによって私の姿が照らされる。

具体的には、丁度私が四十の時に、中津の国立病院の外科の責任者をしていました。その後、東国東地域広域総合病院、今の国東市民病院というのですが、ほとんど同じ規模の大きさです。しかし、中津の場合は国立病院でしたが、向こうは、五か町村で運営している郡立病院のような病院です。大学の先輩がそこで院長を三十数年していたのですが、ちよつと田舎なのです。大分

県をイメージした時に瀬戸内海にぼっと飛び出た半島があります。国東半島と言います。国東半島の別府に面したところの五か町村でつくっている病院が今は国東市民病院と言うのですけれど、私にそこに行ってくれと大学から打診が来たわけです。

その時に考えることはどうしても損得勝ち負けです。行ったらよいのか、得になるか得にならないか、とか、勝ちか負けか、とか、将来、位が上がるかと、いろいろ考えながら私は細川先生に相談したのです。先生が「中津のままでもいいのではないの」、と言われ、私もそうだなと思いつ断りました。

そして、また一年位した時に、大学の教授と医局長がなかなか向こうに行く人材がない。お前は自分で良いと言っているから行かないかとまた言ってきた。困ったなあ……、家を建てたばかりで、妻は反対しているので困ったなあ。仏教の先生に相談をしようと思って、細川先生の会座があった時に、時間を割いて、先生こうなのですがどうでしょうかと伺いました。

「田畑君、苦勞するかもしれないけれど大学がそんなに言うのだったら行ってみるか」と言ってくれたのです。そうすると私も「ハイ」と言いました。そして赴任いたしました。先生は私をちゃんと見透かしておられました。小賢しく損得、勝ち負けで善悪考えているのを見通しておったのです。一応、赴任したのです。しばらくしましたら先生から手紙が来しました。その手紙の一節にこんなのがありました。「あなたが然るべき場所に行つて、然るべき役割を演ずるとい

とは、今までお育ていただいたことに対する報恩行ですよ」と書いてあるのです。

〈板書〉

報恩行

今日は報恩講で、恩ということです。「あなたが然るべき場所に行つて、然るべき役割を演ずるといふことは、今までお育ていただいたことに対する報恩行ですよ」それを見た瞬間、私はどういふ感覚かと言うと、パシッと、「まいったなあ……」と、「餓鬼だつたなあ」、「人間になれていなかつたなあ」と思いました。仏教で地獄、餓鬼、畜生、修羅、人、天とありますね。この上から二番目の人というのは、考える力があるのが人であり、多くの多くのお蔭さま、間柄というのは、色々な人たちの間で支えられているな、教えられている、という、考えることが出来る人間だけれども、下の方の餓鬼は取ることにしか考えていないのです。自分のプライドが傷つかないように位を取ろう、給料をいっぱい取ろう、院長というポジションを取ろう。まさに取ることにしか考えていない自分の姿を見せつけられまして、「ああ、まいったなあ」という思いがしました。

〈板書〉

天 人 修羅 畜生 餓鬼 地獄

人間 間柄

そういう意味では、恩ということ話を話では聞いていたけれども、身体では受け止めていなかったのです。仏教というのは頭で分かったのではなく、「まいった」とか「ガクツ」という形で自分の姿を知らされることを通して響いてくるものがあると思うのです。こちらで言えば自分というものが、やればできるのですがまだやる気が起きない。やればできるのだと言って自分というものを見る目が弱いわけです。

本願、南無阿弥陀仏という浄土の教えは、常に私の姿を本当に影なく照らし出す。言われてみれば浄土教の教えはいろいろありますが、たとえば唯識の教えを聞いたり学んだりしますと、人間の心の中の深層というものも本当に良く見抜かれているなあと思います。私たちが聞法をしていきますと、仏さんの前には隠しようがないことが段々わかってきますね。だから本当に仏さんは私のことを知り通しておるなあということをおもうのです。大阪大学の名誉教授をしておられます大峯頭おおのみねあきこという本派のお坊さんですけれど大阪大学の哲学の教授をしていた先生が、「仏さんは私たちの財布の中の額まで分かっているのですよ」というのです。私は仏さんは、いくらなんで

も財布の中の額までは知らんやろうなあと思いつたのです。ですが最近はもしかしたら仏さんも財布の中の額まで分かっているのではないかと思えるようにまでなってきました。

だからこのところ仏さんは私たちのことを見透かしておられるということが仏法の教え、聞法ということを通して知らされてきました。本当に仏さんの前に何も構えなくていいというか、飾らなくていいということは仏さんの前で非常にリラックスできるわけです。ちょっと余談な話ですが、仏さんと私の関係は仏さんが見透かしているのです、私は構えなくていいようになりますと本当にお任せしますという、仏さんと良い関係なのです。それが分かってくると困ったことが見えてくるのです。何が見えてくるかというと、私と私の奥さんや子供との関係です。

〈板書〉

見透かされている

子供

仏

私

奥さん

私と仏さんとはツウカゝの関係で、こっちは仏さんのことは全部分らないが仏さんは私を見透かしている。本当に見透かしている関係。それに比べてうちの奥さんとの関係、子供との関係

が、お互いに分かっていないなあと言うことが分かってくるのです。それは非常に困ったことな
のです。困ったことと言うか、本当は仏さんとの関係みたいに夫婦の関係も親子の関係も同じ合
う関係でありたいわけですが、そうでもない。それをどうするかということですね。南無阿弥陀
仏というお念仏は私たちを救うということは、仏さんとの関係が出来ていたら、私と妻、子供の
関係はお念仏が必ず救ってくれる。救ってくれるとはどういう事かなあということを考えてみた
のです。

私なりの受け取りですがね。妻との関係、子供との関係は、私は子供が全部家を出て行って
しまつて、夫婦だけの生活ですから結婚して四十年位なりますから波風が立たないように立たな
いように大体小賢しくお互いがふるまっています。時々、意見の違いが出てくるわけです。
どんな違いかと言うと、最近では私の家は田舎で桑畑の中に家を建てたので土地は広いのです。
単価が違うのでこの辺とは比べようがないのですが、それでも一五〇〇坪くらいあるのです。一
本の銀杏の木があるのです。これは私が小学校三年生の頃は小さかったのですが、六十何年間で
かなり大きくなってきた。妻があゝの銀杏の木は大きくなって葉っぱが落ちて掃除が大変だから切
ろうということになった。私としては私と同じように年を重ね、大きくなってきたので親しみが
あるわけです。切りたくないなあと思うのですが度々言いますと、こっちもカーツと来ますけれ
ど結局切ったのです。奥さんの言う通りにしたのです。

その時に一つはどうせ私が先に死ぬのだから死んだらすぐ切るだろうと思って、もういいかと思いました。そこで時々こういう摩擦が起きると私の中にいろいろな感情がわきおこります。その時、「あなたはいつもお寺とか病院で穏健な良い人間だと言われているけれど縁次第ですぐ腹を立てる存在ですよ」、と教えてくれる菩薩さんだと。こういうふうにお念仏で見るとこの視点を私たちに教えてくれるわけです。お念仏によって仏さんと私の関係を知らされる、同時にそのことを通して親子夫婦の關係が私のことを教えてくれる「菩薩さん」だと言って受け取ることを通して、通じない關係を再構築するという形が一つあるのだらうと思うのです。

もう一つは地球上に何億という人間がおりながら親子夫婦という役割をお互いに演ずることとは、よほどのご縁であろうと言って、「ご縁を大切にしよう」ということを教えられることよって、お念仏で通じない關係を再構築して私を救ってくれるのではないかと私は今思っております。

仏教というのは日常生活で具体的に色々な問題に出くわした時にそれが教えられることよって、自分の生き方とか、考え方を軌道修正させる。生きる姿勢を正されると言いますか、先ほどの「然るべき場所に行つて然るべき役割を演ずるといふことは、今までお育てをいただいたことに対する報恩行でありますよ」、という言葉を頂くと、ああ、餓鬼だった、人間にならなくて、と生きる姿勢を正されるわけです。こういうふうにはたらいていなければそれは仏さんではない

わけです。

南無阿弥陀仏を通して私たちはそのはたらきに触れることによつて「仏さんはいらつしやる」ということを受け取れてくるのです。ですから、ただ向こうに眺めて阿弥陀如来像だとか阿修羅像だとか、なんとなく向こう側に眺めて美術品や文化財みたいに見るということは、これは「化仏」、化の仏さんで私に何もはたらいしていないのです。これは真仏ではないわけです。本当に私たちは「真仏」という、私に具体的にはたらいしている仏さんに触れて「仏さんはいらつしやいますか」ということを受け取れることが大事になるわけです。

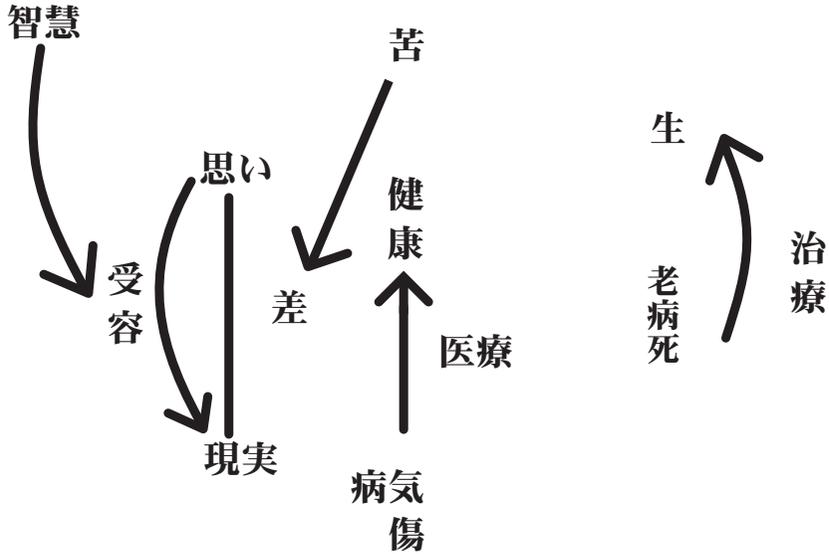
私は学生の時に聞き始めてそれから毎月一回の聞法をなさいと先生から教えられて、毎月一回の聞法で足りなければ時々月に二回にしなさいと言われました。それと寢食を共にして聞法をすることが大事だと。先生は先生のお家、次は会館を建てられ土曜日と日曜日の一泊二日で土曜会というのをずっとしてくれておりました。私も出来るだけ出席するようにしておりました。なかなか皆勤賞まではいきませんが、先生が途中でこんなことを言われました。「あんまり真面目にずっと来る学生は途中でぶつんと止めることがある。時々さぼりさぼり来ると続くのだ」と。そっちが私だと。だからあまり真面目に皆勤ではなく、時々さぼりながらも続けることを通して継続した聞法、お育てをいただくのだなあということではお育て頂いてきたことがあります。

〈休憩〉

「仏さんはいらっしゃいますか」ということを考える時に、私たちは具体的に自分の姿が照らされ、自分が念仏するものを浄土にむかえ摂るぞと言って摂取不捨される、そして「お任せします」というところを私たちがしっかりと聞いていくことが私は大事ではないかと思えます。

私が今取り組んでいることをご紹介します。日本の医療現場には宗教者がいないわけです。それはキリスト教の聖路加病院とか、淀川キリスト教病院とか、キリスト教関係の病院には宗教者がいますし、天理教の奈良にある天理よろづ相談所（病院）なんかにも宗教者がいらっしゃいます。だけれど日赤とか済生会、国立など、大きな主だった病院には宗教者がいません。これは世界を見て見ましても、日本が異常な状態なのです。アメリカではベッド数、百に対して一人の臨床宗教師、チャプレンというのを置くのが一つの基準になっているくらいで老病死の現場には必ず宗教者がいないと……、そればかりではないですが、病院で老病死に対応しなければならぬとき、これを今の医学だけでこれが解決できるかというところと出来ないわけです。私たちが学んできた医学は、老病死はあってはならないことで、元気な状態に戻せという治療を一生懸命学んできたわけです。老病死をどう受け止めるかということとは習ってないわけです。色々なことを話したいのですが、さわりの所を話します。

(板書)



四苦

苦ということをどのように対応するかという事です。苦に対してどのように対応するかという時に苦の原因は何かということとです。私たちの「思い」と私の「現実」に差があることが苦になるわけです。思い通りにならないということが苦になるので。そうしますと病気であるとか怪我をした人がもとの健康の状態に戻してくれという事が、医療ということが役割を果たして差を縮めているわけです。先ほど良くなくていく患者さんには良いのですが良くならない患者さん、すなわちもう健康に戻すことができない患者さんにおいてどうするかといった時に、確かに痛みに対する治療は出来るようになってきたのですけれども健康には戻せないわけです。この苦は放

置されて何もできないわけです。

私も外科の訓練を受けていく中で本当に先輩方から学ぶことは沢山あったのですけれど、癌の患者さんでもう手が付けられなくなってきたら先輩方はさっと冷たくなるのですね。こんなに冷たくなるかというくらい冷たくなるのです。ビジネスとして切り替えをしているのでしようけれどね。こっちは人間関係が出来るとこの方も救われなれないといけないのではないかという思いがありますね。この苦を救うことは今の科学的な思考（医学を含む）からは出てこないのですね。ところが私たちが仏さんの智慧の世界に覚りとか、信心を頂きますということが出てきますと、結果として私の現実を受容するということが起こってくるのです。

お東のお坊さんの清沢満之きよざわまんしという方が「天命に安んじて人事を尽くす」という言葉を残しておられます。細川先生の師、住岡夜晃先生すみおかやこうも「宿命を転じて使命に生きる これを自由といい 横超という」、横超というのはお念仏の心（教え）です。お念仏の心によってそういう世界が転じられるのだと。「宿命を転じて使命に生きる。これを自由という。これを横超きよという」。この清沢満之ざわまんしの「天命に安んじて人事を尽くす」のこのところが自分に与えられて老病死すらをも、受け止めて生き切っていけるといふ世界をこの言葉は教えております。

〈板書〉

「天命に安んじて人事を尽くす」 清沢満之

「宿命を転じて使命に生きる これを自由といい 横超という」 住岡夜晃

そういう意味で、仏さんの智慧の世界に出させて頂くことを通して私の思いが私の現実を受容する。こういう世界を知らされることが図式的に書きますとこの両方の取り組み（治療という医学と仏の智慧による自己の現実の受容）がありまして、初めて一人一人の患者さんの苦しみ悩みが少なくなることが可能なのです。

現代の医学教育に関わることで象徴的なことを仏法の会座で経験しました。私が別府で「歎異抄に聞く会」をしております。そこに私の大学の先輩で大分の外科を長年リードしてきた辻先生という方がいらつしゃいました。九大の名誉教授ですけれども私が「歎異抄に聞く会」をしておりますしたら聞きに来られていたのです。八十位前後の頃です。もう亡くなられましたけれど。私がこの話をいたしましたら大分県の外科を指導してきた先生が感想を言われました。どういった感想かと言いますと、「私は今日まで人間の苦しみを救うのはこれ（医学的治療）しかないと思っております。仏の智慧で現実を受容する、こんな世界があるということを知って聞きました」というのです。医学教育を一生懸命真面目にやってきましたと考えると患者さんの悩み

苦しみを救おうと思ってそれにはこれしかないと思い、それに命を懸けて頑張ってきたような先生でした。

またこんな感想を言われました。「夜、手術して上手くいかなかった患者さんのことが思い出されて、時々、夜眠れなくなるのです」と、だからすごいですね。私なんかすぐ忘れてしまうのですが。そういう意味で一生懸命頑張っている先生は、そうなのだなあと。上手くいった症例は大体忘れていきます。でも上手くいかなかった症例が思い出されて夜、眠れなくなるのですというのです。真面目な先生はそういうことだなあと思います。

だからこれは一人一人の悩み苦しみを救うというのだけれど、良くならない患者さんに対しても全力を尽くすのですが、仏さんの智慧の世界には、この現実を受容する。「天命に安んじて人事を尽くす」「宿命を転じて使命に生きる」という世界があるわけです。これは一人一人の目覚めの領域ですが、ここのところが現代的な科学的な思考だけで生きる者には、こんな世界があることを思いもしないわけです。

例を一つ紹介します。岩手県に沢内村という岩手と秋田の県境の山奥に私も一回冬に行ってみたのですが雪が多いところですよ。昔は隠し領地だと言って、幕府に申し出ていない土地だったと言っていましたけれど。そこを昭和五十年頃、行政と病院が一緒になって、地域の命を守るという取り組みで成果をあげていた村でした。昭和四十年後半前後に保健とか公衆衛生の医療関係者

で知らない人がいないくらい地域でした。そこで増田進という医師が頑張っておられた。その先生がある雑誌の中に掲載された対談の記事で、癌の患者さんで非常に対応に困った患者さんがいたと。すると近くに入院していたお年寄りが来て「念仏しなさい、念仏しなさい」といつていたと。その人はやがて穏やかになって亡くなっていきましたと対談の中で触れておりました。私は東北の山奥だから真宗ではなからうと思っていました。後で分かったことは、その当時の村長さんは太田祖電さんというお東のお坊さんでした。しっかりしたお坊さんだったようでした。そのことが分かって、あのお念仏は真宗の念仏かと思ひまして、増田先生に事情を聞いてみたいなあと思っていました。連絡先がすぐに分からなくて……。

たまたま連絡先が去年医学関係の雑誌に先生の今の活動が出ていましたので、インターネットを調べて先生に手紙を出して先生が書かれていた話はどのような話でしたか、どの雑誌に載せていたのですかと問い合わせしました。すぐに先生から手紙をいただきました。それにこんなことが書いてありました。ちよつと紹介をしますと、

「あれは古い病院の頃でしたから昭和四十年代の後半です。患者は五十歳代の女性でした。隣接する秋田県の病院で横行結腸癌の手術を受け、沢内病院に紹介され自宅療養となったのでした。患者さんは元気になると頑張っていたのですが、ふとしたことで夫婦が口論になった時ご主人が『お前は癌でもう治らないのだ』と言ったのがきっかけで彼女は地獄の思いに落ちたのでした。

往診していた私に「本当に癌か、今まで隠していたのか、治療はしているのか」と責められました。私はあるのままの話、抗がん剤などを使っていることを説明しましたが納得したように見えても元気が失われました。やがて病状が悪化して入院しました。彼女は『眼をあければ鬼が来る』、『目をつぶれば地獄が見える』と訴えられたものでした。その時、近くの病室にいたおばあさんが彼女の枕元にしげく通ってくるようになりました。そして『死ぬのは怖くないよ』。『お念仏を称えなさい』と繰り返すのです。そのうち彼女はおばあさんの言うようにお念仏を称えるようになりました。やがて彼女は落ち着き表情も穏やかになってきました。笑顔も見られるようになって私たちもほっとしたものでした。そして安らかに永眠したのでした」

これは私たちが言うならば安らかに往生浄土したのでした。そのことを当時の村長さんに「村長さんよりも凄い宗教者がおられましたよ」と話をした記憶があります。「田舎で長く暮らしていますと、この人達の生死に対する達観と言いますか、素直さを感じ私は良く町の人達にはかなわないねと言ったものでした。本当に尊敬する村人がいたものです。」というお手紙をいただきました。

そこにお念仏が本当に具体的にはたらいてその患者さんは穏やかになって往生、生き切ったことです。死んだというよりも往生浄土、仏さんになったと言える状況だと私は思います。こういうふうにお念仏の理解がどこまであったかどうかは分からないにしてもお任せする、

お任せしておけば何の心配もないよと素直に感じる素直さがあるとそういう展開があるということがあるのです。

もう一つ紹介したいのは今、東北大学でそういう臨床の現場で活躍できるお坊さんを育てようとするのが国立大学で六年前から臨床宗教師課程というのが始まり、欧米ではチャプレンとしてすでに行われているのがあります。

〈板書〉

臨床宗教師（チャプレン）

何故これが始まったかと言いますと、東北大学で肺がんの手術を担当していて、途中から癌の痛みをとる緩和ケアをしていた岡部健という先生がおられました。丁度私よりも年が二つくらい若くて数年前に亡くなられたのです。この先生は緩和ケアという癌の痛みの訪問での治療をずっとしていたのです。そうしたら自分自身が胃癌になり、そうして手術を受ける時には肝臓に三つ転移があつて、それも手術して取ったのですが、術後に四つ目の転移が見つかって病気がどんどん進んでいきました。そして病気が進んでいくなかで先生自身がこう言っているのです。「死に行くものの道しるべを失った日本の文化に驚いた」。美味しい物を食べるとか、美しいものを

見ていくとか、いい音楽を聞くとか、明るい方向の文化はいっぱい情報がある。しかし、老病死に直面した時にどういふふうに最後を生き切っていったらいいかという文化が日本の文化の中になくなっていく」と。「死に行くものの道しるべを失った日本の文化に驚いた」と書いている。

それで臨床宗教師が必要だと言って一生懸命取り組んだのです。これには伏線がありまして、この苦しみを救うという取り組みで医師は一生懸命これをやっているが、患者さんが本当にこれを喜んでいるかどうかという問題があるわけです。この岡部先生は若かりし頃、静岡県 の 県立病院で仕事をしていました。その時にこんな経験があることをご紹介します。丁度先生が大学を卒業した頃ですねベトナム戦争とかそういうものがあったって人工呼吸器の技術が急に進歩したわけです。昭和五〇年代。日本でも人工呼吸器を使い始めた頃の経験を先生はこんなふうに書いております。「治療一辺倒、こうすることが患者のためと一生懸命やっていた。治療一辺倒だった私の考えを一変させる患者さんに出会った。私が当直していた時である。結核手術で肺がつぶれ肺機能が低下していた六〇歳代の男性が肺炎を起こして緊急入院をしてきた。こういう状態だと抗生物質の投与や肺炎の治療だけでは回復が難しい。そこで私は人工呼吸器をつけて肺炎を治療して肺炎が治った後で人工呼吸器を外そうと考えた。静岡で人工呼吸器で治した患者さんはいなかった。救命延命に血道をあげていた私はこの患者さんが第一号になるはずだと燃えていたのだ。

当時はこの症状で生きて退院するのは難しく病院でそのまま亡くなるのが普通だったのに気管

を切開して管を入れて吸引器で痰をとれば生きているまでは回復させたのだから私としても得意満面だった。その後ずっと外来で見てきたのだが、二年ほどたったある日肺炎を起こして再び入院をした。

その時いきなりこう言われたのだ。気管チューブを全部外してくれ。私はこの管を外したら痰が溜まって死んでしまう。そんなことは出来ないと言ったが患者さんは毅然として翻さなかった。お前が若くて一生懸命だったから我慢してきたがもういい加減にしてくれ。このまま生きていても家族に迷惑をかけるだけだし生きていることに未練はない。親しい友人は皆シベリアで死んだ。あの世に行ったら会えるかもしれない。あの世で会いたい、かといって自殺はしたくない。頼むから自然にいかせてくれ。

我慢していたと言われた時、本当にショックだった。私の説得には耳を貸さず最後には外さないと飛び降りるとまで言われたからにはどうにもならなかった。私はどうせ呼吸器を外したら痰が絡んで苦しくなるから考えも変わるだろう。その時はまた管を入れ直せばいいと思って、今だったら戻せるからもう一回入れないかと言いつつ続けたが彼は最後までいらぬ、自然に最後の時を過ごさせてくれと拒み続け数日後に亡くなった。延命よりもはるかに強い欲求があることに気付かされた。私は人工呼吸器をつけたことが良かったかどうか悩んだ。

それに我慢させていたなんて、私は何をやってきたのだ。私が治療したのは何の意味もなかつ

たのかと自問し続けた。医者が患者の命を救いたいと最善を尽くしてもそれは医者の自己満足に過ぎないことが、そのことをこの男性は身体を張って教えてくれたのだと思う。このことで自分たちがやっている医療への視点が変わらざるを得なかった。直ぐに何かが変わったわけではないが、より患者の視点に立つようになったと思う。希望があれば出来るだけ告知をするようになったのもその頃からである。」

こういうふうには、医師の立場で良いことしているのだ、とやっても患者さんの人生観とか価値観と、すれ違いが起こる。患者の人生観を尊重するという、両方の取り組みがあるのだということとを患者さんは身体を張って教えてくれたというわけです。ですから医療現場の老病死をどういふふうを受け止めるかというその人の人生観とか価値観というものを十分に尊重しながら医療を展開しないと医者独自のやりで良いことしていると言っていて、結局患者さんを苦しめていることになっているということもありますし、そのことの警告を先生は本の中に書かれております。

〈板書〉

人生観 価値観

ちよっと極端な話ですけれど今、高齢者が食べれなくなってきた鼻から管を入れたり胃に穴を

あけたりして療養型の病棟で生かされている人が三十万人とも四十万人とも言われております。これが本当に良いことなのかどうかといことです。欧米では二〇年前にはそういうことをしていましたが、患者さんの為になっていないということが分かったので食べさせる工夫はするけれどもそれ以上すると虐待になってしまう。だから寝たきりになって鼻から管を入れたり胃に穴をあけたりすることはしていません。患者の為になっていませんと言っているのです。それが今の現実にあるのです。

そういう時代性の中で、凄いニュースというか、アメリカがアルカイダを一五〇人ほど戦争の時、連れてきてキューバのモンタナ基地で尋問しているわけです。そこで三分の一は深く関わっていないのが分かった。それでオバマ大統領が大統領になった時に送り返すということを、サインをしたら共和党の議会がアルカイダの為に消費を禁止するという条項を付け加えた。そうしたらその人たちは宙ぶらりんになった。返せない。それに抗議するためにハンストを始めた。ハンストを始めてそこで死んだらアメリカ政府は非難ごうごうだからそこでどうしたかといったら強制拘束椅子という椅子に縛り付けて鼻から管を入れて栄養を入れ始めた。夜でも昼でもたたき起こしてでもそうしていた。そうしたらアメリカの医師会が医師として本人の同意なしに医療行為をすることは法律以上の医師の倫理規定に違反する、何とか宣言に違反することだから止めるべきだと申し入れた。

その後、そのニュース関連の記事は日本に来なくなりましたから分かりません。それは何かと
いったら虐待だと。日本人が三十万人四十万人の半分の人が、「してください」と言っていてい
るかどうかです。ほとんど医者が良かれと思ってやっているのです。こういうふうには、いのちと
いうものをどういうふうにかえるか。老病死をどういうふうにかえるかというのは国民全体の問
題であり一人一人の自分の人生というものをどう生き切っていくかということが問われているの
です。

科学的合理主義で教育を受けてきた医療者は先ほどの岡部先生が言うようにこれしかない（医
学的治療）と思つて治療をしているのです。こっちの考え方（仏の智慧による受容）があるとは
夢にも思いません。「初めて聞きました」と言う世界ですからなかなか……、医療者と宗教者が
対話をして一人の人の苦しみ悩みをとるということは出来ていない。そこで臨床宗教師を岡部先
生は寄付を集めて寄付講座で始まった。それで岡部先生が亡くなったものですから、ちよつと後
二年続けたら正式な講座になるのだと言つて、今、寄付を集めています。

臨床宗教師という制度がどうして出来て来たかと言つと、今まで禅宗でも日蓮宗でも病院に行
つてという動きはあつたのです。だけど一つの宗派が行くと布教、宣伝の為に来たのではないで
すかといつて、それはどうしてかといつと、新興宗教などが病院の中にいっばい来て患者さんの
弱みに付け込んでいろいろ宣伝活動をしているわけです。それと同じに見られるので病院の管理

者としてはそういう人が入って、病院がいろいろトラブルに巻き込まれては困るから宗教者を来ないようになっている。ところが東北大学は国立大学ですからすべての宗教に対応する、そして相手に寄り添う。いわゆる伝統教団の宗教関係者で全ての宗教・宗派に浅く広く対応して個々の深い問題、禅宗の人は禅宗、真宗の人は真宗でバトンタッチしながら患者さんに寄り添って、という形の臨床宗教師を育てようというコースが平成二十四年から始まりました。

そして三年前から東北大学と連携して私がおります龍谷大学大学院、実践真宗学研究科もこのコースを始めております。しかしなかなか医療界はそれを受け取ってくれるのが少ないのです。「西本願寺の医師の会」というのを立ち上げて理解のあるお医者さんをつくっていかないとけないなあと思ってやっているのです。西本願寺がビハークラ研修という形で医療現場や福祉の現場で働けるお坊さんとか、門徒の人達を教育する機会をずっとやってきていまして、それで訓練を受けた鹿児島におります長倉先生という先生はそういう研修を受けて、その後キリスト教の病院などに行つて具体的にどうするか習つて、是非、鹿児島でも頑張ろうと思つてですね、鹿児島で主だった病院百以上、一緒にやりましようと言つて声かけたのです。全部断られたというわけです。

そこでたまたま私の大学の仏教青年会の先輩で放射線科のお医者さんで小牧さんという人がおりました、この人は聞法していたお医者さんでした。その先生が高校の先輩になるのだそうです

が、その先輩から長倉先生が声かけられたそうです。「今、患者さんで是非お坊さんに来てもらいたい人がいる。明日来てくれないか」と言われたらしいです。そうしたら長倉先生は予定がいつぱい入っていて先生は「来週で良いですか」と言ったら「来週は死んでいるかもしれない」と。それくらい緊迫していたのですね。そこで何とかして次の日に行った。そこで初めて病院で長倉先生は患者と対話をやって、そこから活動が始まったということがあるのです。

その小牧先生がお坊さんたちをどう評価したのかという情報がなかったから、私の先輩になる小牧先生に連絡をとったら、既に肺がんで亡くなっておりました。奥さんがまだ健在だったので奥さんの方に連絡を取ったら主人の物は整理して捨てているのですがちよつと探してみますと言ってくれました。しばらくして、医師会雑誌なんかに投稿した記事がありました。それを送ってきてくれました。それをちよつと紹介したいのです。それはまさに医療現場でお坊さんたちがどのような形の活動の可能性があるかということ。

私はシカゴに昭和五十五年、五十六年に一年半くらい行っていた時にアメリカのシカゴに東西の別院があるのです。私は両方の別院に行ったのです。お東の別院はちよつと治安の悪いところであり、お西の方に子供を連れて日曜学校に行っていたのです。そこのお坊さんが私にこう言いました。アメリカではメンバーが入院したら必ずお寺に連絡があるそうです。そうしてお坊さんがお見舞いに行くのが仕事になっています。お見舞いに行かなかつたら職務怠慢で叱られます。

お坊さんという資格で病院に行ったらどんなところでもフリーパスで入れていただけます。

日本は違いますよ。その恰好では困りますって玄関で断られますよね。アメリカではどこでも宗教者はフリーパスで入れていただけます。この長倉先生の患者とのやり取りを小牧先生が見て記録したのがあるのでご紹介したいのです。

長倉先生が病院へ行って、患者に会おうと思って控室にいた時、そこにいた他のお医者さんの声が聞こえてきたそうです。小牧先生は私立の大きな病院の院長だったので、そこに内科の先生が通りがかりながら「今度、院長が、なんかお坊さんなんか呼んで、頭がおかしくなったのでは？」と話していたのが聞こえてきたそうです。その小牧先生の記録をご紹介します。

「私自身はターミナルケアに仏教を組み込まねばと思っておりました。枕元にお坊さんに来てもらうことを希望する患者さんがいたら是非お願いしようと思っておりました。そして遂に二人の方に巡り合いました。一人の人を紹介します。斉藤さんという五十八歳の男性。お腹の癌で三回手術をしたけれど最後の手術では色々な臓器に転移していて取れなかった。完全に取ると出血する恐れがありほとんど残してお腹を閉じました。このことは彼に伝えなかったのですが、時間と共に増大し、いよいよ最後が近づいて来ました。しかし、いかにお腹がパンパンに腫り、痛くなるうとも愚痴一つ言わず耐えておりました。私は彼の見事な耐えつぷりを驚嘆の眼差しで見

ておりました。でもいよいよ一人で歩けない重症の段階で死を悟ったのでしょうか。悩みをしゃべり始めました。特に気になっていいることと言えばその昔つまらない夫婦喧嘩で家を飛び出し、以後、妻子の生活の面倒を見なかったこと、その為実家に入入りすることも難しくなり、実の母の葬式にも出なかつた等でした。これを聞いて初めて彼がじつと耐えていた理由が分かつたよ
うな気がしました。つまり自分を罰していたのです。しかしながら私がこの悩みを聞いてあげただけではなんら彼の心の重石をとることはならなかつたようです。そこで私はこれこそお坊さん
にお願ひしようかと長倉先生にお願ひすることになりました。先生は心安く来てくださいました。
その患者のその前後の興奮状態は見ものでした。その日は朝からそわそわしていたのです。私が
病室に行くとき一人歩きも出来ない状態なのに何を着ましようか、何をお礼にしましようかと聞く
姿はまるで小学校の遠足の前というところでした。部屋は二人部屋でしたのでその時だけ一人部
屋に移しました。そしていろいろ話をしたそうです。後妻の奥さんも一緒でした。お坊さんが帰
られた後の彼の晴れ晴れとした顔、そして良かった良かったと繰り返すのです。後日、長倉先生
にどういようお話をいたいだいたのですかと尋ねたところ、要点としては世の中にはこの方よりも家
族に酷いことをした人がおり、そういう人でも仏さんはちゃんと救ってくださいさるといいう事。

浄土真宗では『観無量寿経』の中でアジャセが親殺しという罪を犯しても救われていく展開が
他のお経に書かれているわけです。だから無条件の救い。お念仏の教えは私たちの心がけとか、

聞法の歴史とか、仏教の理解とかではなく『素直に「南無阿弥陀仏」、と念仏する』、無条件の救いを説いているということ、あなたよりも更に酷いことをした人もお念仏は救うのですよとゆっくりお話をしたのでしょね。

もう一つは母への供養のお勤めをお寺でしてあげてお約束したということ。このような話を我々医師にせよと言われても逆立ちしてもできません。

このお医者さん非常に謙虚ですよ。多くのお医者さんたちは何というかという俺たちは十分にやっている。

その道の方がそれらしくしゃべって初めてありがたいたくもなろうというものです。お蔭でこの方は長倉先生が又来ると約束してくださいましたのでそれを楽しみに残り二十日を生きました。往生後の彼の顔は安らかで正直ほっとしました。後日、死後、長倉先生と話を分かったことですが一回目の訪問の折、「今、何が気がかりですか」との問いかけに対して、彼は、「後妻が神経痛を患っておりまして、私がいなくなったらあと苦労するかと思うと不憫でなりません」と言っただけです。すると傍らで暗い顔をして話を聞いてきた後妻の顔がぱっと輝いたそうです。後妻という立場にしてみれば、これ以上の愛の告白はないと思います。結局この方に対するビハークラ、お坊さんの役割としては本当にやすらぎを与えたのみか残された人にも愛を残したと言えましょう。とても医師の私には出来ることはありません。本当にお坊さんをお願いをして良かったと

思います。」

これがビギナーズラック【beginner's luck】ということもありますけれど、これが上手くいった批判的なお医者さん達から同じような症例があったら呼ぼうということになってきたそうです。

今、少しずつ鹿児島の方では始まっているのです。だけど日本全体から見ると、まだまだ点みたいな形です。そこに医療現場で老病死をどういうふうに受け止めていくか、それは「なぜこういう病気になったのか」、「死んだらどうなっていくのか」とか、先ほどの罪悪感とか、老病死に直面した時に色々と心の中に出てくる問題を医師・看護師に聞いても答えてくれないのですね。そこに宗教者がいたら救われていく人達もいるわけです。

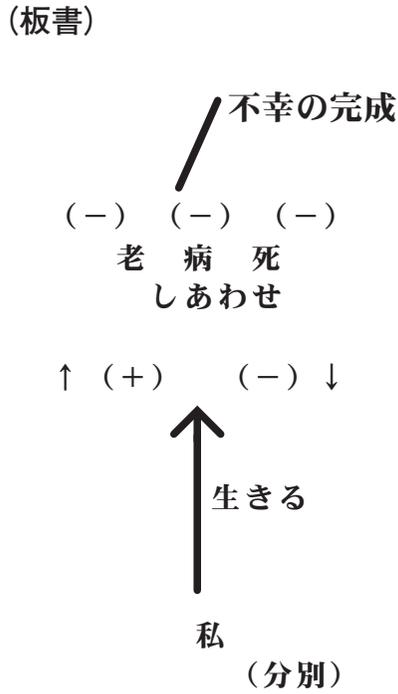
今、残念なのは医療現場でお医者さん達も一生懸命やっているのですけれど、こちら（現実を 수용する）の発想に縁がないもんだから……、世間的なハッピーエンドで終わったらいいのだ、と深まりがないのです。そこにお念仏をして「お任せします」という形の世界を持ち得るすべての人が、無条件で救われていくお念仏の救いの道がお坊さんは何とか伝えたいと思っても医療関係者は人間の死の八割は病院とか施設ですから、そこで俺たちは十分にやっているのだということになるとそこに入っていくことが難しくなる。少しずつそういう歩みも出てきて医療と仏教が協力することによって、一人一人の苦しみ悩みを救う取り組みがやっと始まりかけております。

まあそういう意味では百年間ずっと無しでやってきた。元をたどれば明治の時代にドイツ医学を取り入れる時に、時の政府は天皇を中心とした国家神道をやろうとしたために、その背後にある宗教性を拒否して医学技術と知識だけを学んだ。そのあとずっと戦後まで病院には医学技術と知識だけを学んでその宗教性を排除してきたのです。それがあから日本の医療現場には宗教性がないわけです。

結核とか種々の感染症の戦いの時代性の中には宗教とかの必要性は少なかったかも知れないが、高齢社会を迎えて皆、長寿が実現して、老病死に直面する時代になりました。そこでは治療できない、老・病・死が具体的な問題になっています。そうするとその現実をどう受け止めていくかという問題を、医学からはあつてはならないことだと一生懸命に治療ばかり取り組んできて、老病死をどう受け止めて最後に生き切っていくかという文化が医療現場に育ってないのです、まさに宗教が無いため色々なひずみとして今、起こってきていることが思われるのです。

今日のテーマに戻りまして、「仏さんはいらっしゃいますか」。私たち戦後の教育を受けてきて右肩上がりの経済成長の中で物の豊かさ、便利さ、快適さが段々と実現できてきました。そこで多くの人は科学的な合理思考で間に合っているのではないか、別に仏教はいららないのではないかという声が九十五パーセントの国民はそう思っていると思われれます。だけれども何が問題かと言

うと、老病死に直面した時にどうするかという問題があるわけです。児玉暁洋先生は「私たちが生きるということは皆、幸せと目指して生きるのだけれども、幸せになるためのプラス価値を上げてマイナス価値を下げる。この世間の物差しですと頑張ってきた時に、「老い」につかまり、「病」につかまり「死ぬ」ということはマイナスのマイナスのマイナスだから正に「不幸の完成」で人生は終わるのですよ」と言われています。『「幸せ」を目指しながら結果として「不幸の完成」で終わるとというのが私たちの分別が考えている全体像ですよ』と言う。



こういう臨床の現場でそういうことが本当に思われるのです。八十歳過ぎの元気なご婦人が来られて腰が痛いとか膝が痛いとかいわれ、色々話(病歴)を聞くと、「先生、年を取って何もい

いことないねえ、目は薄くなり、耳は遠くなる、腰は痛くなる、膝は痛くなる何もいいことがない」というわけです。確かに年と共に私たちはプラス・マイナスで言ったら、マイナス要因が増えていくかも知れないけれど、お東の専修学院を長くご指導された信國淳先生は本の中で「年を取るということは楽しいことですね。今まで見えなかった世界が見えるようになるのですよ」と。今まで見えなかった世界が見えるようになるという、そこに仏さんの智慧を頂きながら年と共に人間として成長し、成熟していく世界があつて初めて良い社会となる、と思われのです。

私が受け持っていた八十八歳ご婦人の高血圧と不眠症の患者さんがいらつしやいました。この人は一か月一回診察に來られていました。診察室で話をしていたら、真宗の門徒で毎日『正信偈』をあげております。『正信偈』が長いから半分ずつしておりますと、言う人でした。このお婆ちゃんがある時、自宅で意識がなくなつて倒れているのが見つかった。高血圧があるからつきり脳梗塞か出血だろうと、佐藤第一病院の脳外科に運ばれて調べてみたけれどどこも異常がない。そうこうしているうちに意識が戻つてきて、職員が聞いたら私が処方していた睡眠導入剤をたくさん飲んだと。この方は睡眠薬の影響がなくなれば入院する必要がないので自宅に帰つてまた私の所に來た時に、「先生私なんか役にたたない、皆に迷惑をかける、本当なら姥捨山に捨てられてしかるべきなのに、あのとときあのまま眠りたかつた」と私に言うわけです。だからこの分別の

物差しで言ったら自分が役に立たない迷惑をかける。

一九七三年ころフランスのボーヴォワールという哲学者が『古い』という本の中で「人生の最後の十五年、二十年を廃品と思わせるような文明は挫折していることの証明です」と書いてある。仏教文化がないと世間の物差しが全てだと思おうようになります。そうすると年をとってきますと、「役に立たない」「迷惑をかける」という、正に自分自身を廃品として傷つけようとする文明は挫折していることの証明です。

このお婆ちゃんは真宗の門徒さんですから、せっかく『正信偈』を毎日あげているという真面目な門徒さんですから……。私は退院後はじめて来られた時にこう言ったのです。「南無阿弥陀仏とはどういう意味か分かりますか」と聞いたのです。そしたらこのお婆ちゃんは「南無は帰依する」「帰依するのだから、阿弥陀仏に帰命するではありませんかねえ」と。頭しっかりしていますね。そこで私が「仏さんの名前は何と言いますかと聞いた」、そうしたらこのお婆ちゃんは「阿弥陀如来とか阿弥陀仏じゃありませんかねえ」と言われた。これも知的に間違いとは言えない。そこで私は「仏さんの名前は南無阿弥陀仏なのよ」と。「南無阿弥陀仏の心はね、役に立つとか役に立たないとか、迷惑をかけるとか、迷惑をかけんとか、そんな小さな（卵の）殻を出て大きな世界を生きようということなのよ」と言うとお婆ちゃんは、「ああ考え違いをしておりましたねえ。考え違いをしておりましたねえ」と、独り言のように言ったのです。このお

婆ちゃんまだ見込みがあるなあと思いました。

それから法話のテープを私が持っておりましてのでいっばい貸してあげました。そうしたら家族が、「家で休んでいる時には法話を聞いております」と言っておりまして。そして九十歳で穏やかに家で亡くなりました。私が往診して死亡診断書を書いたのですけれど、どこまで仏教が分かったか、分からないかという所はあるのですけれど、そこに世間の物差しの中で自分が振り回されて、自分で役に立たない、迷惑をかける、と、肩身の狭い思いに自分で自分を傷つけていく、そういうことを超えるお念仏の心に触れていくところがやっぱり無ければ豊かな社会とは思えないのです。

そこに南無阿弥陀仏の心とは、私たちの先生は、「小さな殻を出て汝大きな世界を生きよ」と、こう言われた。小倉でしっかりしたお話をしてくださる伊藤元という先生は「南無阿弥陀仏は人間に生まれて良かった。生きてきて良かったという人生を歩む人になって欲しいという心なのですよ。人間に生まれてきて良かった、生きてきて良かったという人生を歩むものになって欲しいというのが南無阿弥陀仏の心ですよ」と。私たちが南無阿弥陀仏の心に触れることを通して必ず人間に生まれて良かった、生きてきて良かったという人生を、歩む私に導かれていくわけです。そこに仏さんのはたらきを通して、そういう世界に私たちが出させて頂くはたらきを自分自身が受け止めた時に仏さんはいらっしやる。だから仏さんの大きさを私たちが感得する。

ちよつと余談な話をして最後にしますが、先ほどの仏様の世界をこの大きな世界とします。私たちの分別の在り方が仏教の世界を少しずつ分かつてくるわけです。分かつてくるというか受け取れてくるわけです。時々、新興宗教の教祖が私はキリスト教の救いと仏教の悟りが分かったと言う人が時々おるのです。私が今、龍谷大学と一緒に仕事をしている唯識を大学生の時から勉強をされた早島理はやしまおさむという先生がいらつしゃって、私よりも三つくらい上みたいですが、先生に新興宗教の人が「仏教が分かったというのはどのように考えたらいいのでしょうかねえ」と聞いたたら、「仏教が分かったと言った瞬間にそれは嘘になります」と。

その心を探ねてみると、少し分かつてきたら「次なる課題が見えてきました」、という表現になり、分かったという表現はとりません。私たちは南無阿弥陀仏の心に触れていくと「更に聞いていきたいなあ」、「さらに仏の心を探ねていきたいなあ」と聞法していく意欲がかき立てられるのは方向性として正しいことを教えてくれています。だから分かったと言った瞬間に嘘になります。更に聞いていきたい、更に尋ねていきたいというふうに、私たちをなさしめる受け取りが、方向として正しいということです。

私は次のことを経験していたので、「なるほど」と思いました。人間の遺伝子のゲノムというのが三十億対のアミノ酸ペアだということが分かつてきたのです。ゲノムが最初は実際に機能

しているのは十五パーセントで、八十五パーセントは何か機能しているかどうか分からないという情報があったわけです。その後、機能不明の八十五パーセントの中のまた四十パーセントから五十パーセントに意味があると分かってきたのです。十年位経って。このニュースをNHKのあるニュース番組で聴いていたら、素人のニュースキャスターが専門家に、「人間のゲノムの今までに意味がないと思っていた部分にも、かなりの部分が意味があると分かってきたということは、全体像がかなり分かってきたのですね」と言ったのです。私たちは百あるうちの八十五の半分が見えてきたからかなり分かってきたように思うのですよね。そしたら専門家は何と言ったかというところ、「今まで意味がないと思っていた部分に意味があるということが分かってきたので、更に未知なる世界が広がりました」と言ったのです。だから分からないことの問題が少し見えてきたら、研究課題が広がってゆく、その課題の部分が広がっていくわけです。

かなり分かったという表現をせずに、さらに未知なる世界が広がりました。更に尋ねていききたいという気持ちが起こってきました。私たちが仏教を学んでいくと、仏の世界の大きいことに驚きます。宝の蔵みたいなものだと受け取れるのです。

「仏さんがいらっしやる」ということがはっきり受け止められるようになってきますと、仏教の世界が全部分からなくても、仏の働きの場を歩むことに意味を感じ取る世界に導かれます。『願

生偈』というお経の一節の中にこういうところがあります。

衆生所願樂 一切能滿足

（衆生の願樂するところ、一切よく満足す）

『無量壽經優婆提舍願生偈』 『聖典』 一三六頁

「衆生の願樂するところ、一切よく満足す」という浄土の徳をほめたたえている一節を児玉
暁洋先生が次のようにいただいております。

本物（浄土）を欲する意欲に生きる時 本当の満足がある。（児玉暁洋師）

浄土というのは仏さんの眞実の世界ですから、「本物を欲する意欲に生きる時、本当の満足がある」、とはどういう意味かと言ったら、本物を欲する意欲とは私たちが「聞法して往生浄土の歩みをする」ということです。仏様の世界を更に尋ねていく往生浄土の歩みを生きる時、本物を欲する意欲に生きる時に満足の世界が与えられている。

どこかに行きついて満足するのではなく、その歩みの中に本当に出遇うべきものに出遇って良かった、更に尋ねていきたいという思いに私たちは常に満たされた世界を生きていく歩みに導かれていくのです。どうしても私たちは目的があつて往生浄土と言うと、浄土に行き着いた時、喜

びを感じると思うかも知れないが、そうではなく、本物を欲する意欲に生きる時に、往生浄土の歩みの時に、私たちは知足という世界に導かれていって、生きる死ぬは仏様にお任せで、私が生かされていることで果たす私の役割を使命、仏さんから頂いた仕事だとうけ止めて、本当に生き切って生きればいいのだと思えるようになるのです。

もう一つ老病死の関係で思うことは、大阪大学で哲学の名誉教授の大峯おおみねあきら顕先生は宗教哲学の先生です。フィヒテという十七世紀の哲学者を研究されました。フィヒテの研究の中で知らされたことをとおしてこんな一節があります。「本当にそこで精一杯生き切っている人達は自然とお任せになっている。ところが、今を精一杯生き切れていなくて未練がある人は、明日こそ良くなるぞ、来年こそ良くなるぞと未来にそのことを満たされるだろうという思いを持つような時に、その未来が閉ざされる死というものを作って死を怖がる」。どういうことかと言うと、『今を未練なく生き切った、南無阿弥陀仏』で生きる人たちは自然とお任せになる。ところがあの人が協力してくれないので出来なかつたなどと他に責任転嫁して愚痴を言い、来年こそは良くなるぞと、いつも来年こそ、来年こそと思っている、『今の生き方が未練のあるような生き方』の人は死を作って死を怖がる。」と書いてある。

私たちが今日を、精一杯、「南無阿弥陀仏」と言って生き切る時に、私が私になりきっていつて、後は仏様が良いようにしてくれるわという形になる。それは「天命に安んじて人事をつくす」

「宿命を転じて使命に生きる、これを自由といい横超という」こういう表現になるのでしょうか。私たちがお念仏によって生きる姿勢を正されると同時に、自分に与えられた場を今、精一杯果たさせて頂く世界に出させて頂くことによって、結果として死は「お任せ」になっていくことをどうも仏教は私たちに教えてくれているのではないかと思うのです。だから世間的な病気が良くなつて良かったとか、何か困ったことが解決できてよかった、それもあつた方が良く越したことはないのですが、上手くいっても上手くいなくても自分に与えられた役割、与えられた場を精一杯果たすことを通してお念仏は、知足の世界に生きるように導いてくれることと思わせて頂いております。そういう意味では単純なことですが今を精一杯生き切るのには、お念仏をして初めて生き切っているのではないかという気がします。これでひとまず講義の時間を終わります。

〈質疑応答〉

司会) どうも先生ありがとうございます。それでは質疑応答に入りたいと思います。先生のご法話を聞いて、あるいは日頃思っていることなどは是非先生に尋ねていただければと思います。

淡海)

先生ありがとうございます。先生はお医者さんという立場に置いて、老病死ということ
を視点にして話しいただいた分けなのですが、私ども近代化されてきた中で、どうして
も思考回路が善悪、プラス、マイナスという事しか考えられないようなことで生きている
ところも問題点のご指摘をいただきました。全くその通りだと思いました。それですね、
今、伺いながら思ったのですが、子どもはどうしても病気とか老いということの苦しみを
治していこうという、お医者様に頼っているわけです。そこにおいてどうしても楽にして
いただきたいと思つて病院にかかっているのですが、それでも私自身の考え方から言えば、
どんなに医療を尽くして頂いても元の若さに戻るわけが出来ないということがあります。
その問題と共に先ほど先生は自分の苦しみということの現実の思いというものを受容せよ
という表現をなされましたが、この問題は医療の問題としてお話頂いたのですが、実際こ
れを老病死だけでなく生という問題、生きるということに当てはめた時も同じになると思
うのです。つまりそれは今、現実では教育問題で子供たちの沢山のお方が亡くなつていっ
たり、いじめの問題があったり、働いている人は働いている人で色々な問題を含んでいま
す。それと全く同じパターンだと私は今回聞かせていただきました。従いまして医療でも
つている問題が、実際は今、子どもが生きている世間全体に通じる問題とまったく同じ視
点だなということをよく教えさせていただきました。とても参考になり嬉しく思つており

ます。それとともに一番問題は思いの中に現実を受容していく問題でございませうけれど、
実際具体的にそこが一番のネックでして、どのように受容をしていくかお念仏でという結
論的なことは聞法させて頂くことで深まっておりますが、そのところを具体的にお話し
て頂けるとより参考にさせていただけると思っています。

先生） 私たちの考え方をハイデッガーという方が計算的思考と全体的思考、全体的思考は根源的
思考とも言うのですが。仏教はどうも私はこちらの思考（全体的、根源的思考）ではない
かと思えます。どういうことかと言いますと、計算的思考と言いますのは、英語で言うと、
H o w t o というカラクリを色々考える。たとえば私が今日ここに来るにあたって、
北九州の飛行場までに今、自動車道が出来たら何分くらいで行きつくと、そうしたら家を
何時何分に出るといいだろう、何分くらいに自動車道に入って、そうすると飛行場に何時
ごろに行きつくと、からくりを理解してそれに合わせて上手く効率よく能率よくやってい
こうという……、これがからくり、計算的な思考なのです。我々の普通の思考、損得、
勝ち負け、善悪の判断も全部、この思考です。全体的な思考と言うのは英語で言うとなぜ
に答えるものだと。(Why)

〈板書〉

ハイデガー

計算的思考

(How to からくり)

局所的思考

理知分別 管理支配

① 対象化

② 煩惱

← 思い通りにならない

← 「苦」

全体的思考 (Why)

根源的思考 大局的思考

「物の言う声を聞く 管理支配しない」

計算的思考と全体的思考はどういうふうの違いかと申しますと、計算的思考は物事のからくりを解明して、いつの間にか私たちの理知分別で物事を管理支配しようとしているのです。そうすると管理支配しようとするとなんか思い通りにならないという「苦」になっ

ていくのです。この時に問題なのは、これは少し難しいのですが、私たちの思考の中に一つは「物事を対象化して考える」ということと、もう一つは「理性・知性の中に煩惱が潜んでいる」ということが大きな原因だととらえています。

全体的思考は、「物の言う声を聞く」、そして管理支配しないという思考だと言います。仏教の場合は物の言う声を聞く。どういうことかと言うと、「この現実は何を私に何を気づかせようとしているか」、「この現実は何を私に教えようとしているのだろうか」と受け止めるのです。自分の奥さんとちょっと摩擦が起きた時に「この現実は何を私に何を気づかせようとしているのか」。そしてそれを管理支配しない。それが全体的な思考になってくるのです。

余談なことですが、計算的思考は局所的になるのです。全体的思考は大局的な視点です。ノーベル賞をもらうような研究は全部物事を対象化して分析的に解明して、それを極めていくのです。それは局所的な専門家なのです。「人間とは?」、とか、(人生とは?)という大きな問題は計算的思考では適していない。全体的思考で考えていかなければなりません。

面白い例は日本経済新聞の裏面に私の履歴書というのがいつも出ているのですが、今から一年前に高島屋ホールディングスの奥田務さんという方が書いておりました。その人が

若かれし頃、京都の高島屋で外国旅行用の鞆を売り始めた。そうしたらあるご婦人が来て、ご主人が外国旅行に行くから大きなケースを買いに来ました。「この鞆は番号を三つくらい合わせて押さえてガチッと開けるのですよ」と説明をしていたら、そのご婦人が、「うちの主人、頭が悪いから出来るかな」と言った。後ろに湯川秀樹が立っていたと。びっくりしましたと。湯川秀樹というと、私たちは日本で初めてノーベル賞をもらって凄いなと思うのですが、鞆の開け方が出来るかなあと奥さんが言ったと。計算的思考はどうしてもからくりの解明をしていくわけです。そうすると病気というからくり、人間の身体のからくりを解明して、それを使って上手く管理支配して治療しようとするのです。

全体的思考はこの現実が私に何を目覚めさせようとしているか、この現実には私に何を教えようとしているか、というふうな物の言う声を聞くというのが全体的な思考のWhyに答えるものである。そして管理支配しない。たぶん今おっしゃった現実の問題に管理支配を私たちはするわけです。

同時に対象化と言うのは説明が非常に複雑になるのですが、私という存在はガンジス河の砂の数ほどのいろんな縁や因が仮に和合して私という存在が有らしめられていると教えます。この私とこの周りの環境はぴったりと一致している。自分の身と土は一致している（身土不二）。私たちは対象化として物事を向こう側に眺めますから全部 「I—i t」

の関係（三人称的）で見てしまうのです。この前、志慶眞先生が言いませんでしたか。「I ch—E s」です。あそこに関係するのですね。どういうことかと言うと、私とこの環境、i t 三人称で見る、そして選べると思っっているわけです。

ところが私にはこういう経験があるのです。仏教に出遇って初めて見えてきたのですが小学校五、六年の頃、日本は貿易で原料がないから材料を輸入して加工して輸出して加工貿易をすると習った。私はそれを習った時に、「しまった、アメリカに生まれればよかった何で日本に生まれたのだ」と日本の国に生まれたことが受け取れませんでした。高校の頃受験勉強しながら家が豊かだったら国立ではなく私立大学に入るのなら受験科目が少なくて良いのに、何で私はこんな家に生まれたのだと。あまり勉強をしないでも東大へ行けるくらい能力の子供に生んでくれればいいのに何でこの親が……と。私のところでは進学校に行くのに宇佐市から中津市へ、朝七時の汽車に乗らないといけない。そうすると六時に起きないといけない。逆算すると十一時半くらいには眠たくなっていますね。中津に行ったら同級生が昨日は十二時まで起きていた一時まで起きていたという話を聞くと「しまった何で私は宇佐に生まれたのだ」、中津に生れていればもつと勉強する時間があつたのに、と、自分のことが受け取れない。さらに根性が悪かったのは、歴史の勉強しながら明治時代に生まれたら大正と昭和の歴史を覚えなくて良いのに「何で私は昭和に生まれたの

だ」と。良く考えてみればあなたが日本であなたの家で両親がいなければあなたはないのですよ。それなのにあなたは周りを選べるように考えている。それは迷っている。環境とあなたがぴったりと一致しているのです。確かに宇佐が嫌だから中津が嫌だから大阪とか埼玉とか選んでもいいのですが選んだところがまた一つのご縁なのです。それをついつい自分は選んでこれをしようと思ったのあの人は協力してくれなかった。お金がなかった。時代が悪かったと愚痴を言う。対象化するために、あなたにとってその状況がぴたりと一致しない。身土不二では、この現実が何を私に気付かせようとしているのか。この現実は何を私に教えようとしているか、という発想が出てくるわけです。それを三人称的に私と周りを別々だと思うと、ついつい、もうちょっと良い状況があったら私はやれたのに……とか言うわけです。「物の言う声を聞く」ということはハイデッガーが言っているのと教えてもらったのですが、原典は見えてないので、計算的思想はHOW toという、からくり解明する思考、普段の思考はこちらです。全体的の思考が大事なのだ。仏教の思考は全体的の思考に関係するのです。人間とは、人生とは、という大局的な問題を考える時には全体的思考で考えないと計算的思想では局所的になって全体が見えなくなります。幸せを目指しながら不幸の完成で終わる。これは全体が見えてない証拠です。ちょっとヒントになってもらえるといいかなと思います。

淡海) ありがとうございます。全くその通りだと思います。実は言葉を何でも定義付けたりするという考え方をしますよね。先日ある先生からお話を聞いた時に、たとえば愛に対してアガペーであり、エロスであり、エゴであるとしたがるというのですね。そうしたらあなたは本当に人を愛したことがありますかと言われたのですね。で、まさにそのことだなあと思ったのです。今その話を思い出しながら、だからそれでしか物を見えていない、そういうふうに分析して生きているのが私たちの姿かなあと感じさせていただきました。今後物の声を聞くそういうような管理支配しない発想で変えて見ることだと聞かせていただきました。ありがとうございます。

司会) 他にどなたか、折角ですから。

有久) 本日はありがとうございます。先生の話の中で常に自分の思いと自分の置かれている現実に愚痴や不満を持ってしまふとかいう、もつとあまたこうだと、先ほども言われました、こう生まれていればこうだとかいうようなことに対して、私自身ももつとこう出来ていたらとか、日頃もつとこういう自分であつたらとか、いろいろ思ってしまうのですが、今、自分の子供が四歳になつていて、周りの環境とか、今日あつたこととかを一日一日

を夜寝る前に布団のところまで振り返ってくれるのですが、一回、自分の用事にひたすらつきあわせた日がありまして保育園を休ませて、その時、区役所へ連れて行って手続きをしていたり、子供にとつてつまらない状況だったと思うのですけれど、帰ってきて私に今日はすごく満足な一日だったと言ってくれたのです。何でかと言うと、区役所で働く人のまねをしながら何番の方何番の方こちらへどうぞ、ご住所をお書きくださいとか言っていていく人がいてそれがすごく満足だったと。そのまねをし始めたのですね。その働いている人の。たとえば私も夫も働いているのでたまにいつも遅い夫が早く帰ってきて、皆で一緒にご飯を食べたりすると、今日はパパが早く帰ってきてくれたから凄く幸せだったとか言つて、一日一日何が幸せだったかというのを私に教えてくれるのですけれど、それをちよつと保育園の連絡ノートに書いていたら子供の名前が「碧^{あおい}」と言うのですけれど、あおいちゃんは保育園でもお家でも満足を見つけるのがとても上手な子供ですね、と言うふうに書かれていたのです。先生からの返信を見て私は不安しか言つてなくて、自分でもこういう時があったのかどうか、凄いドキツとして、ハツとしてしまつて、振り返つても自分が一つ一つの小さなことにいつも幸せだなあ、ありがたいなあと思えた日が子供時代から考えてあったかなあと、ちよつと思つてしまうのですけれども、何か今日の先生のお話を伺つて、はたして持つていたものを失いながら取り戻す為にいるいろいろ学び続けてい

くのか、それとも本当は持っていたものを子供の世界が小さいからそうなのか、どちらなのか分からなくて先生のお考えをうかがえればと思います。

先生)

それで該当するものは私たちの理性・知性・分別には煩惱が潜んでいるということがあります。煩惱というのは、一つは我痴、我見、我慢、我愛という、仏教の考え方が思考に入らないとどうなるかという、表面的な価値を計算する（善悪、損得、勝ち負け）。これが私たちの世間的な知恵なのです。仏様の智慧は「物の背後に宿されている意味を感得する」。だから子供さんはこちらの視点を持たれているなあと思う。その物の背後に宿されている意味を。私たちは世間生活をしていたら表面的な、高いとか安いとか、美しいとか美しくないとか、美味しいとか美味しくないとか、振り回されていきますよね。そういう意味で私の考え方が間違いないというのと、人と比較して優越感、劣等感で揺れ動くとか、こういう煩惱で汚染されて、なおかつ表面的なことばかり振り回されていくところに対して、お宅の子供さんが、今日はああだったこうだったと言うのは、まだ煩惱に汚染されていないところがあって、表面でなくて周りの色々な形まで見える、智慧の視点を少し持たれている発言かなと。仏教の智慧と言うのは、何というのか、表面でなくその背後にあるところまでも感得される、物の背後の声を聞いていく中で、その背後にある物の声

も聞こえてくることになる。これに私たちが導かれて行く、それが智慧となったお念仏の働きです、お念仏によって生きる姿勢を正される。餓鬼・畜生を生きていた私が人間にならしめられる。そういう世界に連れ戻して物の考え方とか生きる姿勢を正されることがあるかなと思います。ちょっと十分な答えになっていないかも知れません。世間的な知恵は表面的な価値を計算する。私たちはこれがなければ生きていけません。仏教は物の背後に宿されている意味を感得する。だから物の言う声を聞くことを通して、その物の背後に宿されている意味を感得するという世界に導くのが仏教の智慧としてあると思います。

〈板書〉

煩惱

我痴 我見 我慢 我愛

世間智

表面的な価値を計算する

仏教の智慧

物の背後に宿されている意味を感得する

副住職)

ありがとうございます。ビハラのお仕事も先生はご尽力をされておりまして、先ほど長倉先生とかお話がありました。この関東には築地本願寺が東京にありますけれども、

関東圏でビハラーということのお西さんのご理解とか、病院関係とか、その辺のことを先生の感触からお話し頂けますでしょうか。

先生) 築地本願寺で、「東京ビハラーの会」というのが活動して色々な病院に入っていこうとしているのですが、関係者があの近くにある、がんセンターの中にビハラー活動として入りたいと思っているのですが……、病院関係者がちよつと躊躇しています。聞いてみると一宗一派で来て布教の場にするのではないかと危惧しているのです。私たち浄土真宗の立場で言うのなら布教ということもあるけれど……。宗教的ケアとスピリチュアルケアと違うがありまして、活動の場があるかということもあるけれども、スピリチュアルケアと言うのは、健康の定義の四番目にスピリチュアルということが入ってきているのですが、それは臨床の現場で、たとえば患者が「何で私は癌になったのだ」、「悪いことしてないのに」「どうせ死ぬのなら早く死んだ方が楽ではないか」、とか、「死んだらどうなっていくのだろうか」、と、そういう訴えが患者さんから発せられた時に、私が患者さんに寄り添う。寄り添って聞く。傾聴というか、耳を傾け寄り添うことを基本にしてください。決して布教をしたり、押しつけにならないようにしてください、というのがスピリチュアルケアです。その時は訴えをしている人に寄り添うので押しつけにならないように気

をつけなくてはならない。宗教的ケアというのはお寺に来なさいと。お寺に来れば講師の方が来てお話がありますから仏教の救いの世界とか、仏の心が十分に分かりますよ、とか言って来なさいと。宗教的なケアの場合はそれでいいのですね。スピリチュアルケアという場合は患者さんに寄り添っていくことがあるからこっちの包容力というか、我慢というか、非常に不特定多数に寄り添うということが求められます。聞法しなさい、聞法しなさい、お寺に来て聞法しなさいという形と違い、スピリチュアルケアは出かけて行ってこの人に寄り添うということになるとかなりの時間と忍耐力が入ります。できれば門徒さんとかメンバーの所へ寄り添うという形で始めるしかないかなあと思います。病院に行ったら創価学会の人もおるかも知れない。禅宗の人もおるかも知れない。天理教の人もキリスト教の人もおるかも知れない。でも広く浅く最初になんか困ったことがあったらお手伝いをしましょう、という形で寄り添っていくのです、その人から何か訴えや質問が出てきた時に自分で解決が出来る問題なら対応するし、この人は他の人にバトンタッチしたほうがいいなあという形で、そうする形になります。

〈板書〉

宗教的ケア

私

お寺に来なさい

聞法しなさい

スピリチュアルケア

私

寄り添う 聞く

押しつけは駄目

だからお寺と病院で向こうから来る場合は宗教的で、こちらから行く場合はスピリチュアルケアという使い方をしている。こちらは相手に寄り添うから、不特定多数を相手にするために配慮して欲しい、ということが病院としてあるわけです。なぜかと言うと公的、準公的な場だからあまり一宗一派で押しつけにならないようにしてもらいたい。そうでないと病院としては受け入れがたい。チャプレンというのは、東北大学なんかは神道でも禅宗でも日蓮宗でも浄土宗でも全ての宗派に対して一通り対応が出来るように、浅く広く一応訓練して個別の深いところは次の所にバトンタッチするなり、自分で出来るところは対応する形になる。臨床の現場で色々な形で寄り添う、働いて、患者さんの為になる「はたらき」をしようというのが、チャプレンという臨床宗教師です。日本はそういう訓練を今までほとんどしてなかったのです。お寺に来なさい、聞法しなさいという形が多かったの



です。相手に寄り添って出かけていく場合と、こっちに来なさいというところの違いがあります。臨床の現場では、患者の所に来てくれて、何とかしてくれないか、という需要が多いと思われます。潜在的需要を感じ取れてない、受け取れてない可能性が高いのです。

具体的に関東圏でどこがあるかといったらまだ具体的な病院はないのです。長岡西病院といって新潟のお東のお寺さんがしている病院だったらお坊さんが常駐して緩和ケアをやっています。今はお坊さんは融通念仏宗の方です。真宗でないお坊さんが常駐しております。それは何宗であっても全ての人に対応できる訓練をして対応しようというわけです。そうすれば準公的な場、病院で国立大学でも国立病院でも日赤でも済生会でも受けってくれるという体制が整うのが願われているのです。

副住職) ありがとうございます。いっぺんに広がることではないので少しずつじわじわと、ということでしょうか。

先生)

それとやっぱり日常での門徒さんの所との会話というのが大事ですね。お見舞いに行くといつても、良くなる患者さんの所へお見舞いに行くのは明るくできるのですが、死んでいく患者さんにお見舞いに行った時にどういう言葉掛けをするかというところがあります。そうすると日頃の人間関係がもろに出ます。行ったときにどんな言葉掛けをするかといった時に、今までの発想は頑張れ頑張れしかなかったのですよね。こんな記事があります。

大分合同新聞に六十歳過ぎの方がエッセイを書いております。おじさんは病院へ友人を見舞った。友人はまだ四十代なのに癌に侵され医師から家族に余命を宣告されていた。久しぶりに見た彼はやせ衰えおじさんはショックを受けたが、元気そうではないかと思ってもみない言葉が口をつく。元気だったら入院なんかしていませんよ、と、いかにも辛そうに力なく友人は答えた。おじさんは口ごもった。そのまあ君は若いのだからせいぜい頑張って一日も早く良くして。遮るように彼が言った。頑張って、私は必死に頑張っています。これ以上どう頑張ればいいのですか。教えてください。彼の目からは涙がぼろぼろ噴出した。全身が痛くて身の置き所がないような毎日だと泣きながら訴える。おじさんは顔をそむけて涙をかみ殺した。俺死にたくないのです。まだ死ねないのです。助けてください。いよ。訴え続ける彼から目をそらし、おじさんは心の中でひたすら頑張れ、頑張れと繰り返すばかりだった。こんな時、頑張れという言葉のほかにはどんな言葉があるのだ

ろうか。

その人が悪気があって言ったのではないのですが、頑張れ以外はないのではないか。先ほどの良くする以外ないのです。こういうわけです。相手に寄り添うということがなかなかできないのです。ちよつとそういう話でした。

司会) 時間がきましたので、ここで終了させて頂きます。先生、本日はありがとうございました。

あとがき

本書は平成二八年十一月二十六日、第二十六回報恩講における田畑正久先生（佐藤第二病院院長、龍谷大学大学院教授）のご法話の記録です。

先生は外科医として活躍する傍ら、新聞、雑誌での執筆、講演会など、「老病死をどう受けとめるか」の活動に注力し、幅広く活躍しております。また、ビハラー活動を実践し、医療と仏教の協力関係の構築を目指して活躍されています。

真宗との出遇いは九州大学仏教青年会で細川巖先生（福岡教育大学名誉教授、平成八年逝去）に出遇ったのが今日までの歩みにつながっております。本業の医師としてご活躍されながらも、仏法を説いておられる先生です。

お忙しい中、当寺の報恩講にご出講頂けることが適い大変嬉しく、そして、先生の出遇ったお念仏のお心に触れたいという気持ちで、ご法話を拝聴させて頂きました。当日は、ご法話と同時にホワイトボードをいっぱい板書下さり、懇切丁寧にご法話を頂戴しました。「仏さまはいらっしやいますか」の講題は、先生ご自身が仏さまはおられるという領き確信に満ち溢れ、同時に私達への問いかけを発しておられるのが、ひしひしと伝わってきました。

私達一人一人に本願念仏のみ教え、撰取不捨の真言が照らされてあることを頂き、お念仏に生

きるその証明者として願われていることを感じさせて頂きました。

「生老病死」「四苦八苦」のこの（いのち）、分別の闇を破る阿弥陀様のお心を頂いて、悔いのない人生を阿弥陀様におまかせしながら全うしていくことを改めて気づかして頂きました。

先生にはお忙しい中、原稿に目を通して頂き校正賜りましたこと、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

ご法話のテープを原稿に起こして下さいました、護持会役員の淡海雅子様に感謝申し上げます。

合掌

平成二九年十月八日

第二十七回報恩講にあたり

光照寺 副住職 池田孝三郎

第二十六回 光照寺報恩講 法話

「仏さんはいらっしゃいますか」

田畑正久先生 講述

2017年（平成29年）10月1日

発行 真宗大谷派 弘興山 光照寺

事務局 〒331-0821

埼玉県さいたま市北区別所町102-2

電話 048-651-2781